

キニサクハナノナ

登場人物

たま子

桑島

読む人

どこかしら不安げな表情の男・桑島くわしまが、辺りをうろろさまよっている。時折、思いつめた表情で立ち止まったり、急に頭をなでつけてみたりと落ち着かない様子。

その傍らには、分厚い本を食い入るように夢中になって読んでいる人。

桑島 ……。あの……。

読む人 ちよつと待って！

桑島 ……はい。

読む人 (ページをめくって) ……あつ、そうなるんだ。へえく……。 (本から顔を上げて) ごめんね、すごくいいところだったもんだから。なに？

桑島 ……いえ、なんでもありません……。

読む人 んー？

桑島 ……なにを、お読みになっているのです、か？

読む人 ……そんなことを知りたがってる顔じゃないなあ。

桑島 ……。

読む人 (桑島の顔に近付いてじっと見る)

桑島 (たじろいで) 顔に、なにか……。

読む人 「本当に来てくださるのだろうか」。 って書いてある。「本当にあの人が。本当にこんなところまで」？

桑島 (慌てて顔をこするがハツとして) あ、いや、「こんなところというのとはずね！」「こんなに遠いところ」という、ただそれだけの意味でして……。

読む人 (ニコニコと) 真面目だよねえ。

桑島 はあ……。 (再び顔をこすりながら、さりげなく辺りを窺う)

読む人 一瞬で来ちゃう人も結構いるよ？ こんなところだけどさ。

桑島 ですから……！

読む人 あ、それから鏡はないの。悪いね。

桑島 ……はい……？

読む人 大丈夫大丈夫。髪も乱れてないし、目ヤニなんかついてないよ？

桑島 (動揺して襟元などを正しながら) は、そうですか……。

読む人 もう直<sup>じき</sup>だって。今夜は近くまで来るんだから。

桑島 …… (ふと思ひ出したように) あの、今は、何曜日になりますか？

読む人 今？

桑島 はい。つまり……あちらでは。

読む人 土曜日。

桑島 ……土曜日？

読む人 もうすぐ日曜に変わるけど。

桑島 土曜の真夜中……それはいけません！ 土曜日の夜はいけない！ 連絡をと

る方法はありませんか？ 大急ぎで電報かなにか……。

読む人 あのね桑島さん、ここに来る人たちっていうのはさ……

桑島 だってたま子さんは日曜の朝には……！

たま子 (声) やれやれ、ようやく明かりが見えて来たじゃないの。

二人が声のする方を見ると、上手からたま子が這いずるようにして姿を現す。

たま子 (まぶしそうに) あら。どなたかいらっしやるわね？

桑島、うろたえて読む人の後ろに隠れる。

読む人 (たま子に) どうした？

たま子 なにがなんだかわからないまんまに、真っ暗闇の中をずーっとこうして這いずって来たの。もういいかげんくたびれてしまって。なにか杖になるようなものをお持ちじゃない？

読む人 杖なんていらないでしょ？

たま子 足が悪いんですよ。

読む人 試しに立ちあがってみたら？

たま子 試しに……。(すっくと立ち上がり) あら。(勢いよく屈伸して)

あら？（自分の手をためつすがめつ眺め）あらあら。（確かめるように両手で顔を触りながらなにか言いたげに読む人の顔をじつと見て）……。

読む人 ないんだよね。悪いけど。

たま子 なにが？

読む人 鏡でしょ？ ここにはない。

たま子 そう……（おもむろに両まぶたを指でつまみ、思い切り引っ張ったかと思うとぱっと放してからもう一度そのまぶたを指でそっと撫で）……あらやだ！ すっかり若返っちゃってるわ。あらまー。（面白そうに体を動かしまくる）

読む人 （背後の桑島に）ね？ 本当に来たでしょ？

桑島 はい……。

たま子 いいわねえ、夢の中って！ なんでもありで！（鼻歌を歌いながら辺りを跳ねまわる）

読む人 （再び背後に）ほら、桑島さん！

桑島 はい！ ……しかし、あんなに楽しんでおいでのところへ、お邪魔をしては申し訳ないかと……。

読む人 （ついには大声で歌いながらスキップしているたま子を見て）邪魔するくらいで丁度いいんじゃない？ あ！ たま子ちゃん！ あんまりそっちまで行っちゃダメー！（と下手へ行こうとしているたま子呼び戻す）

たま子 ごめんなさい。ちよっとはしたなかったわね。でも体がどこも痛くないなんて本当に久しぶりなんですもの。

桑島 （思わず顔を出し）どこかお怪我かご病気でも……？

たま子 （手をふって否定）人間九〇も超えるとね、どうしたってあちこちガタが来ちゃって……あら？ あなた……。

桑島 はい……。

たま子 どこかでお会いしましたよね？

桑島 ……はい！

たま子 ……ものすごく昔じゃない？

桑島 そうです！

たま子 んー……。

桑島 自分は以前……

たま子 言わないで！ 当てさせて！

桑島 ……はい……。

たま子 (長考の末) ……八つの時だ……。

桑島 もう少しお年を召されていたかと……。

たま子 チフスにかかって死にかけた時！ そうよ、あの時も暗い道をずーっと来たら急に明るい所へ出て……。そこで熱心に本を読んでいた！(と読む人を指差す)

読む人 よく憶えてたね。

たま子 私がうろろしてたらあなた……。

読む人 「今来た道をまっすぐ帰りな」

たま子 (子どもらしく)「あらどうして？」

読む人 「たま子ちゃんはまだ早いから」

たま子 そうそう！

読む人 (桑島に)「そしたらこの人さ、

たま子 「そっただけ名前を知ってるなんてずるいじゃない。あなたも名前を教え

ないさいよ」

読む人 生意気だったなあ。

たま子 (頷きながら)「だんだん思い出してきた。ちよっと変わったお名前だったのよ。えーっと確かね……「アノヨ」？」

読む人 はずれ。

たま子 ……「コノヨ」……。

読む人 残念。でも惜しい！

たま子 あ、わかった！「ソノヨ」だ！「ソノヨ」さん！ そうでしょう？

読む人 正解！

たま子 (跳び上がって喜び)「当たった！」

桑島 ……。(初めは力なく、やがて精一杯の拍手を送る)

たま子 ありがとう！

読む人 あだ名みたいなんだけどね。 お坊さんのこと「お寺さん」とか言うでしょ。ま、それと同じかな。

たま子 ……。ていうことはなあに？ 私また死にかけてるの？

読む人 「ソノヨ」さんにはね、思い残したことを預かったり伝えたりっていうお役目も時々……

たま子 えー思い残すこと？ そうねえ、主人のことも看取ったし、子どもたちも孫たちも元気だし、ひ孫だって五人とも抱っこ出来たし……もうあんまりないのよねえ。

桑島 お幸せなのですね。

たま子 おかげさまで。

読む人 なくてもいいの。だって今回は……

たま子 待って！ 今急いで探すから！ あ！ あったあった。結婚したばかりの頃ね、主人の姪っ子が受験のために泊まりに来たの。なのに私ったら試験の当日、大寝坊してしまって……。あの日に限ってどうしてまた寝坊なんてしちゃったのかしら。あれは今でも後悔してる。

桑島 そうでしたか……。

たま子 でもね、もう切腹してお詫びするしかないって覚悟を決めた時に、主人が泣きじゃくる姪っ子に怒鳴ったのよ。

読む人 (本のページをめくり)「たま子は神様じゃない！」

たま子 今風に言うと、「逆ギレ」って言うのかしら。でもちょっと嬉しかったわ。読む人 それ思い残したことじゃなくてのろけ話だよね？

桑島 よいご結婚をなさったんだ。

たま子 まあね。でも庇ってくれたのなんてそれ一度つきり。いい人だったけど愛想がなくてね。だから若い頃は時々思いましたよ？ 最初にお見合いした人と結婚してたらなあ、なんて。……あの方、なんておっしゃったかしら……。

桑島 桑島です！

たま子 そう、桑島さん。優しそうな方だったわ。(そこでようやく桑島を見てとらえる。が、すぐさま彼に背を向け)……桑島さん？

桑島 はい！ お久しゅうございます！

たま子 ……さっきの、ご覧になってた？

桑島 さっきの、とおっしゃいますと？

読む人 まぶたビョクンじゃない？

桑島 あ！ 拝見しておりました！

たま子 ……いやだもろ！（顔を覆ってしやがみこむ）

桑島 あれはどういったまじないですか。

たま子 ……。この年になるとね、まぶたなんて引つ張ろうものなら、皮が伸びたまんま垂れ下がって、なかなか元には戻ってくれないんですよ。

桑島 それを確かめておいででしたか。なるほど、まぶたの皮が。（やってみる）

読む人 すぐ戻るね。

桑島 はい、戻ります！

たま子 （向き直って）そりゃあ桑島さんはお若いまんまだから！ ……まあいいか。今さらジタバタしたってね。もともと桑島さんは、私に興味なんておありじゃないんだし。

桑島 いや、決してそんなことは……！

読む人 （本のページをめくり）お見合い、すごくいい感じだったのにね。お食事の後に散歩なんかしちゃって。

たま子 そうよ。私が帰る時だってね。

読む人 たま子ちゃんが乗った車が角を曲がるまで、背筋を伸ばしてずーっと見た。た。

桑島 お見送りというのは、お姿が見えなくなるまで見て送ることかと。

たま子 （ため息）断られるなんて思いませんでしたよ……。

桑島 ですからそれは……！

読む人 だって召集令状が来たんだもんね。お見合いした次の日に。

たま子 知ってます！ その赤紙を理由に断られたんだから！ ……ずいぶんお詳しいじゃない。

読む人 書いてあるから。

桑島 そうなのです。どうやら自分の顔には……。

読む人 顔にじゃなくってここにね、みんな書いてあるの。(と本をかざす)

たま子 桑島さんのことが？

読む人 (下手を指し) あっちへ行った人たちの、一生の物語が全部。

桑島 ……他のみなさんはさておき、自分の一生など読んでいただくに値するほど  
では……。

読む人 一度もないなあ。

桑島 は？

読む人 数えきれないくらい読んでるけど、つまらない物語にあたったことなんて、  
一度もないよ。

桑島 ……はあ。

たま子 そうやって桑島さんはいちいち遠慮が過ぎるんですよ。あの縁談のことだ  
って……方が一を考えてのお気遣いだったんでしようけれど、もしも所帯を持っ  
ていらしたら、それを張り合いにがんばって帰ってこられたかもしれないじゃな  
いですか！

桑島 ですが、あそこからは、結局誰も……。あの南の島からは、ただの一人も帰  
れませんでした。

たま子 ……あの頃と比べたら、まるで夢の中にでもいるような普通の暮らしが待  
っていたのに……。

桑島 その後のたま子さんがそんなふうにお暮らしになれたのなら、自分の決断は  
間違っていなかったということですよ。よかったです。これでもう、思い残すこと  
は……

読む人 あるんでしょ？

桑島 あるんですしたっ！ どうしてもお伝えしたいことがあったのでした！

たま子 私にですか？

桑島 そうです！

たま子 お見合いの日にお会いしただけの私に？ えーなにかしら。ちよつと待つ  
てくださいね。



桑島 当てようとなさらず言わせてください！

たま子 ……はい。

桑島 なんと申し上げてよいやら……あの……花です！ 白くて小さい、お散歩の！ 木に咲いていました……とてもきれいだと……自分は、さも偉そうに……！！

たま子 花で、お散歩の、さも偉そうに……？

桑島 ……。お詫びしなければならぬことがあるのです。それで……お手紙を書いたのですが、お出しすることが、かなわないままになりまして……。

読む人 桑島さん！ ポッケポッケ！

桑島 (言われるままに胸ポケットを覗き、一枚の葉書らしきものを取り出して)

あれ……？

たま子 (その時に強いられた凄惨さを物語るかのように、汚れ果て絶望的にポロポロになった葉書をそっと両手で取り) ……これを、戦地から？

桑島 すみません、ひどく汚れていますね。……読めますか？

たま子 (葉書を見つめたまま) ……。

読む人 (桑島に) やっぱり直接言おう！ がんばろう！

桑島 ……「ウツギ」、でした。

たま子 ……ウツギ……？

桑島 あの日、新緑の中を一緒に歩いた時、たま子さんが見ていらした花の名前です。

本当は、「ウツギ」と言うのだそうです。あの時、うろ覚えのままに違う花の名をお教えしてしまったのだと、後になって知りました。

たま子 ……それを、訂正するためにいらしたの？

桑島 はい。迂闊うかつな自分の言葉を信じて、たま子さんがいつかどこかで恥ずかしい思いをなさるのではないかと気が気ではなく……。本当に、申し訳ありませんでした。

たま子 ……そうですか。あのお花、ウツギって言うんですか。よかったわ、教えていただいて。間違いだなんて思わなかった。桑島さん、すごく堂々とおっしゃったから。

桑島 それはつまりその……少しでもいいところを、あなたにお見せしたかったのです……。

たま子 ……ありがとうございます。本当にご丁寧に、わざわざこんなところまで。

桑島 あ！（読む人に）「こんなところ」というのは恐らく……！

読む人 いいから！

桑島 （居直ってから）こちらこそ、わざわざお運びいただきまして。よりにもよって、土曜の夜に。

たま子 ……土曜の夜がなにか？

桑島 日曜の朝は、早起きをしてパンを焼かれると……。

たま子 私そんなこと言いました？

桑島 はい。

たま子 ……ああ。女学校のお友達を真似てそう言ってみただわ。ちょっと聞こえがいいかと思って。

桑島 ……パンは、お焼きにならない？

たま子 きつと私も、いいところをお見せしたかったのね。

桑島 （ややほにかんでから）それでは、自分はこちらで。（読む人に）ありがとうございます。ございました！

読む人 よかったね。

桑島 （たま子に）いつまでもお元気で。

たま子 いつまでもなんて無茶ですよ。

桑島 （微笑んで）さようなら。（スツと右足を引き、方向転換したかと思うと、まっすぐに下手へ入って行く）

たま子 （手をふり）さようならー！

読む人 ……桑島さん、「卯の花」って言ったんだよね？（と本のページをめくる）

たま子 （手をふり続け）ほら、お見送りは姿が見えなくなるまででしょ？

読む人 （あるページを読み上げる）「拝啓、ご無事でお過ごしでしょうか。誠に良いご縁談をご辞退申し上げておきながら、このようなお手紙さし上げるご無礼を

お許しください」。

たま子 ……はあ。見えなくなっちゃった……。

読む人 「あの日咲いていた白い花のことを、ご記憶のことと存じます。わたくし 私は卯の花と申しましたが、正しくはウツギです。あなた 貴女が大層気に入っていていらした木に咲く小さい花の名を、間違えてお教えしてしまったことが、今も悔やまれてなりません」

たま子 (葉書に語りかけるように) よかったんですよ。「卯の花」だって。

読む人 「卯の花」って、「ウツギ」の別名だもんね。

たま子 ちよつと、続きは？

読む人 この手紙を書きかけたところまでで、桑島さんの物語は終わってるんだ。

たま子 ……間違えてなんかいなかったのに……。「おんなじ花の名前ですよ」って、言わないままにしちゃった……。

読む人 行っちゃったよ。かつこよく。

たま子 かつこいいのは当然よ。だって守ってくれたんだもの。私が恥をかかないように、若い未亡人にならないように、普通の暮らしが送れるように、守ってくれた人だもの。

読む人 そつか。

たま子 ……さて！ 私もぼちぼち行こうかしら。あらやだ、桑島さんと一緒にすればよかったじゃない。(と下手へ向かう)

読む人 そつちじゃなくて！ さつき来た道をまっすぐ帰りな。

たま子 ……どうして？

読む人 たま子ちゃんはまだ早いから。

たま子 ……なーんだ。(と踵を返し) ……あっち側へ行ったら、私のこともその本に載るの？

読む人 そうだね。

たま子 ソノヨさんが読んでくれるの？

読む人 じっくり一生懸命読むよ。読んで、いつまでも憶えてる。

たま子 ……いつまでもなんて無茶じゃない？

読む人 それが一番のお役目だもん。そのためにここにいるんだからね。

たま子 ……それなら……それなら、いいわね！（と、上手に行きかけ）ねえ、やっぱり鏡はあった方がいいわよ。なつかしい人と会ったりこれから旅立ったりつて場所に鏡がないなんて。私、今度来る時持ってきて来てあげる。

読む人 ありがとう。

たま子 それじゃあまた。その時に。

たま子、上手へ去って行く。

読む人が読書に戻ろうとすると、「お見送り！」というたま子の声。読む人、大きく手を振る。

やがて再び本を開き、集中した様子で静かに丁寧にページをめくる。